

「いくつになっても」

昨日、福井市で福井県私立幼稚園協会の教職員研修会が行われました。敦賀教会幼稚園は今回の参加を見送ったのですが、私は、研修会の運営スタッフとしてお手伝いをしてきました。講師の先生は、子どもとの対話を研究されている方で、ともすれば、教育というものが、先生から子どもへの一方的な指示、命令、評価となってしまい勝ちなところ、いやいや、子どもの声をしっかり聴いてみると、思いがけない子どもの思考力、感受性に気付かされることもある、というお話を聴きました。忙しい大人や先生の立場からは、「そんな悠長な時間はない」とか「その話を聴いている間、他の子どものことはどうするのか」という声も在り得るでしょうが、「一人ひとりを尊び、ありのままを大切にする」という敦賀教会幼稚園の方針とは、とてもピッタリだなと思い、興味深く、また励されました。

この研修会の内容の話を続けると、とても長いので、話し合いの時間を含めて全 6 時間の研修でしたから、とりあえず、それは置いてといて。今日の聖書箇所のお話に繋がることとして。私の待機場所に近いところにベテラン然とした参加者がいらっしゃったので、少し世間話をさせてもらいました。「今日の研修、良いお話ですね」とか「やっぱり勉強するって大切ですね」とか、そういう研修会に、まあ、ありがちな話をしていました。でも、その中で、私が言うとちょっと宙に浮いて、白けてしまう言葉ですが、「年齢や経験を重ねると、そうだからこそ、子どものことを勝手に決めつけたり、自信満々で頓珍漢なことをしちゃたりする。だから、研修会に出て、若い人たちと一緒に学ばないとね」と。このベテラン感たっぷりの先生は、来年退職予定の女性の園長先生で、77 歳とのこと。ちなみに講師の先生は 48 歳、来場参加者の多くは 20 代、30 代の若手の先生たち

でした。

来年職を去るのに、でも、もしお子さんがいれば同年代くらいの講師の先生の話を「若い人たちと一緒に学ばないとね」と言って聞きに来る園長先生って、・・・私もそういう牧師であり、その時はどうなっているか分かりませんが、そういう園長でありたいなと思いました。

「いくつになっても」と今回の説教題を設定致しました。・・・でも、実は、聖書箇所と、ある程度の話の筋と、そして説教題とを決めるにあたり、結構な葛藤がありまして。私自身が80歳、90歳という、ベテランよりもさらに上の、人生の達人と呼べる領域で、この聖書箇所に触れて、「80歳になってもね、まだまだ」と語るなら、一番しっくり来るんだろうなあ、と思いつつ、39歳の私がそれを言って良いものか、と。はい、先に結論を言ってしまうなら、今日の説教は「たとえ人が80歳になっても、まだまだ神様は御心を留められ、期待されているんだよ」ということです。ただ、私がそう考えているというより、聖書にそう書いてあるので、そこは、ちょっとご了解頂けると、有り難いなって思います。でも、「生意気言って、ごめんなさい」とも、やっぱり思います。なので、私の言葉ではなく、神様の御言葉を、どうか味わって欲しいと思います。

神様は、エジプトからイスラエルの民を連れさせるにあたり、モーセと、その兄アロンを指導者の立場に据えました。正確に言うと、今日の聖書箇所にある通り、「見よ、わたしは、あなたをファラオに対する神の代わりとし、あなたの兄アロンはあなたの預言者となる」のだと。「ファラオに対して」という条件付きですが、モーセは「神の代わり」になると言われています。そして、兄アロンは、神の代理人であるモーセの言葉を預かり、語る者であるということですね。その目的は、神様を信じて、万難を排し、出エジプトを成し遂げること。もちろん、そこには神様御自身による介入も約束されています。それが、この急ごしらえの神の代理人と、その預言者の背中を押し、よろめく足を支える大きな力でした。

実は、今日の聖書箇所に書かれているところ以前まで、モーセとアロンは、まだその与えられた役割に納得と言うか、覚悟が定まっていませんでした。モーセが神様に訴えた「ああ主よ。どうぞ、だれかほかの人を見つけてお遣わしください」という言葉と、「御覧のとおり、わたしは唇に割礼のない者です。どうしてファラオが私の言うことを聞き入れましょうか」という言葉は、この二人が置かれている、なんとも心許ない状況を表しています。しかし、今日、この箇所をもって、いよいよ、ようやく、決心して、その与えられた任務を全うするために、本格的に動き出します。

さっき、私は、「神様は、エジプトからイスラエルの民を逃れさせるにあたり、モーセと、その兄アロンを指導者の立場に据えました」と言いました。そして、この今日の聖書箇所が含まれている書物も「出エジプト記」と言います。だから、今日のお話は、文字通り「エジプトからイスラエルの民を逃れさせる」物語です。しかし、一つだけ大事な点を付け加える必要があります。それは5節の後ろの部分の御言葉。「エジプト人は、わたしが主であることを知るようになる」。この御言葉は、とても象徴的な、深い意味のあるもので、逃げ延びたイスラエルの民が神様に感謝して讃美するなら分かりますが、この後、神様から「十の災い」を被るエジプト人たちも主なる神様を知ることになると言うんです。それは、敵の神を否応なく認めるという消極的な意味では無くて、「私たちも、主なる神様の関りのある民なのだ」という信仰の芽生えなんですね。事実、エジプトには「コプト教」と呼ばれる独自のキリスト教の教派があります。確かに、エジプト人は「わたしが主であることを知るように」なったということですね。

そして、このエジプト人という括りを、「異邦人たちも」という風に読み替えてみると、さらに興味深い。出エジプトの出来事は、イスラエルの民が救済されるというもので、本来なら異邦人である私たちにとって全然関係のないことです。でも、こうやって聖書に記録され、その後もユダヤ教の文化の中で、過越しの祭として祝われ、そこから、最後の晚餐という新約聖書、キリスト教に

おける大事な宴が催され、イエス様の十字架に繋がり、最終的には復活を祝うイースターのお祭りへと帰結していきます。「イスラエルの人々をその中から導き出すとき、エジプト人は（異邦人は）、わたしが主であることを知るようになる」という宣言は、今を生きるクリスチヤンである私たちまでも含む、とても長くて広い視野を持っているということです。今から、3200年とか3300年の出来事です、イスラエルの民がエジプトから逃げ延びたのは。でも、その古い古い出来事は、未だに色褪せず、熱を持ち、「わたしが主であることを知る」という神様の目的を果たし続けているわけですね。

そして、そんな数千年に及ぶ大事業、大いなる御業の担い手になったのが、モーセとアロンです。そこまでの偉大な功績を認めつつ読むと、尚のこと味わい深い、6～7節の御言葉。「モーセとアロンは、主が命じられたとおりに行った。ファラオに語ったとき、モーセは八十歳、アロンは八十三歳であった」と。もちろん、このお話が古代の伝承であり、人の寿命設定に、かなりの補正と言えか、誇張が入っているのは事実です。出エジプトの長旅を率いたモーセが天に召されたのは120歳の時でしたから、ちょっと現実的じゃない。でも、その補正や誇張を排しても、やっぱり、「高齢になって見出され、人生の最後まで用いられ続けた」という点は変わりません。

まあ、正直、私は80歳になってしまったら、出エジプトどころか、町内会の旅行の段取りさえやりたくないって思うでしょう、きっと。「さすがに神様、それは無理ですって」と祈りつつ、文句を言いつつ、よろめく足はよろめくままに、震える手は震えるままに、自分の中で進みゆく老いの実感に浸っていると思います。でも、いくつになっても、神様に祈ることと、文句を言うことと、あと御言葉に聴くことはできる、というクリスチヤンの特権は、忘れていたくない。「主が命じられたとおり」って、自分にとっては何だろうと考えて、受け止めて。・・・それは「隣人を自分のように愛しなさい」だろうか。あるいは、「受けるよりも与える方が幸いである」と信じることな

のだろうか。「強く雄々しくあれ」なのだろうか。「安息日を心に留める」ことなのだろうか・・・。

聖書は私たちに沢山の「主が命じられたこと」を教えてくれています。その全部を完璧にできなくとも、でも、時々は 80 歳にもなって出エジプトという大事業を覚悟して実行に移したモーセさんとアロンさんことを思い出して・・・。自分自身の奉仕と献身の志を新たにできればいいですね。いくつになっても、こんな私にもできることって何なんだろうと。77 歳にもなって 20 代、30 代の若い人たちに混じって研修会に出ること？ もっとシンプルに「神様」って祈る日々を送ること？ 私たちの信仰の入り口が、それぞれ異なるように、年を重ねて示すことのできる信仰の形も、それぞれ異なるでしょう。「これじゃなきゃダメ」という了見が狭いことは思わず、神様に愛されている自分のことを大切に、いくつになっても用いられていることを信じて、自分には意味と価値があると確信して、今週もご一緒に神様を見上げつつ歩んで参りたいと願います。お祈り致します。

神様。今日もあなたに招かれて、この賛美と祈りのひと時に集えたことを感謝します。ここには、多様な年齢層の方々がいます。あなたが定められた成長と老いを過不足なく味わい、活力に滾る時も、無力に背を丸める時も、色々な時を過ごしています。しかし、あなたは、そんな多様な年齢、多様な時を過ごす私たちを等しく御心に留めてくださり、御声を掛けてくださり、明日を生きる力と価値を与えてくださっています。そのことを信じて、いくつであっても、いくつになっても、あなたに愛された一人として、心を高く上げ、目も高く上げ、自らの人生を歩んで参りたいと思います。モーセとアロンに与えてくださった、あなたの力強い御言葉が、今日を生きる私たちの上にも豊かに注がれ続けますように。どうかお願い致します。

このお祈りを、大切なイエス様の御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。

11月召天者を憶える祈り

聖書：エフェソの信徒への手紙 1章 11～14 節

キリストにおいてわたしたちは、御心のままにすべてのことを行われる方の御計画によって前もって定められ、約束されたものの相続者とされました。それは、以前からキリストに希望を置いていたわたしたちが、神の栄光をたたえるためです。あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いをもたらす福音を聞き、そして信じて、約束された聖靈で証印を押されたのです。この聖靈は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証であり、こうして、わたしたちは贖われて神のもとのなり、神の栄光をたたえることになるのです。

中野機策兄 なかの きさく けい (2005年11月1日召天)

高島梅野姉 たかしま うめの し (1967年11月7日召天)

杉原 保姉 すぎはら やす し (2004年11月8日召天)

岡本幸枝姉 おかもと さちえ し (2000年11月11日召天)

長谷川寿み姉 はせがわ すみ し (1964年11月16日召天)

向 かず子姉 むかい かずこ し (2017年11月18日召天)

中山直枝姉 なかやま なおえ し (1983年11月19日召天)

吉田次子姉 よしだ つぎこ し (1989年11月25日召天)

松木重秋兄 まつき しげあき けい (1944年11月25日召天)

中村與吉兄 なかむら よきち けい (1999年11月26日召天)

細井花子姉 ほそい はなこ し (2020年11月30日召天)

神様。秋も深まり、収穫感謝やアドベント、クリスマスへの備えも始まるこの季節。私たちは11月にあなたの御下へと召された信仰の先達を憶えて祈りを捧げています。1年の一巡りの中に、あなたは春夏秋冬を定められたように、人の一生にも様々な季節を定められました。順風の時、逆風の時、幸せな時、不幸な時、喜びの時、悲しみの時。今、名前を読み上げ心に留めている11月の召天者の方々も、そんな色鮮やかな人生を全うされ、走り終え、あなたの御下へと旅立たれました。どうか、先に召されし敬愛すべき兄弟姉妹の、その人生の喜怒哀楽をあなたが御心に留め、永久の平安と祝福で満たしてください。そして、未だ地上での歩みを続ける私たち一人一人に、豊かな慰めと、進むべき道標をお与えください。天にあっても、地にあって、あなたと共に恵みに与れますように。

この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名を通して、あなたの御前にお捧げ致します。

11月誕生者の祝福祈祷 聖書：詩編145編8～14節

主は恵みに富み、憐れみ深く、忍耐強く、慈しみに満ちておられます。主はすべてのものに恵みを与え、造られたすべてのものを憐れんでくださいます。主よ、造られたものがすべて、あなたに感謝し、あなたの慈しみに生きる人があなたをたたえ、あなたの主権の栄光を告げ、力強い御業について語りますように。その力強い御業と栄光を、主権の輝きを、人の子らに示しますように。あなたの主権はとこしえの主権、あなたの統治は代々に。主は倒れようとする人をひとりひとり支え、うずくまっている人を起こしてくださいます。

神様。寒さを感じることが少しづつ増える中、主の誕生を予感する時期を私たちは過ごしています。いま11月に生まれた方々の事を憶えて祈りを合わせています。この方々の人生の道のりが、常にあなたによって守り導かれてきたことを感謝すると共に、その誕生の日から新しく始まる、新しい1年が、どうか喜び多いものとなりようにお願いを致します。喜怒哀楽を繰り返す毎日を、あなたが顧みて、その日ごとに労いと、慰めをお与えください。11月誕生者の上に、あなたの道を歩むことの平安と、主イエスの枝として連なることの幸いを豊かに注いでください。この祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。